

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
殺菌消毒成分	塩化セチルピジニウム	スプロールトローチ	口中で頻りに遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。														1回1錠を1日3~4回かま ず口中で徐々に溶解し て使用する。	咽頭炎、扁桃 炎、口内炎
	塩酸クロルヘキシジン	塩酸クロルヘキシジントローチ・ヒビテン	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的低濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌にくらべ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性をしめすが、一般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。														通常、1回1錠(塩酸クロルヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抗菌剤を含む口腔創傷の感染予防
	ポピドンヨード	イソジンガーグル	殺菌菌に対する効果、殺ウイルス(コクサッキーウイルス、エコーウイルス、エンテロウイルス)効果を有する。またヒト免疫不全ウイルス(HIV)に対しては、イソジンガーグルの30倍希釈液で30秒以内に不活化した。その他ポリオウイルスに対しても効果が認められた。														用時15~30倍(本剤2~4mLを約60mLの水)に希釈し、1日数回含嗽する。	咽頭炎、扁桃 炎、口内炎、抗菌剤を含む口腔創傷の感染予防、口腔内の消毒

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴・治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ			適応禁忌	慎重投与				症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害 の再発・悪化のお それ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
ヨウ化カリウ ム	内服のみ																	
ヨウ素	プレボダイ ンソリューシ ョン	使用濃度にお いて、栄養 型細菌(グラム 陽性菌、グラム 陰性菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有 効である。 細菌、真菌 に対する殺菌 効果、結核菌 に対する効果が 認められる。							好適中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、経内 投与、妊婦の経内 投与(新生児 に一過性の甲状腺 機能低下)			眼に入らないよう 注意。外用にのみ 使用する	妊婦中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広 範囲の投与で 先天性甲状腺機能低 下症の乳児、 浴液の大量かつ長時間 の接触によって皮膚 発赤、接触皮膚炎		1本剤を塗布する。 2本剤を患部に塗布する。	1手術部位(手術 野)の皮膚の消毒、手術 部位(手術野) の粘膜の消毒 2皮膚・粘膜の 創傷部位の消毒、 熱傷皮膚面の消毒	
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。											大量服用時には、 悪心、嘔吐、 腹痛、下痢、肝 機能障害・外用 にのみ使用し、 内服しないこと		0.05~0.2w/vvの液として 使用する。	化膿局所の消毒、 泌尿器・産婦 科手術中術後、 化膿性疾患(せつ、 よう、扁桃炎、 副鼻腔炎、中耳炎)		
抗炎症成分	アズレンスル ホン酸ナトリ ウム	含嗽・アズ ノール錠	消炎作用及 び創傷治癒 促進作用、ヒ スタミン遊離 抑制・白血球 遊走阻止作用 を有する										抜歯後等の口腔 創傷(血餅の 形成が阻害され ると考えられる時 期)にはげしい洗 口は避ける。		アズレンスルホン酸ナトリ ウムとして、1回4~6mg≦ アズノール錠:2~3錠を、 適量(約100mL)の水又は 微温湯に溶解し、1日数 回含嗽する	咽喉炎、扁桃 炎、口内炎、急 性歯肉炎、舌 炎、口腔創傷		
塩化リゾチ ーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 瘢痕形成・組 織修復作用: 膿液の分解と 排出作用: 出血抑制作用												作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しない。		1慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、 喀回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰排出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 270mg(力価)を3回に分け て経口投与する。2歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の融解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	1慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀回 数の多い気管 支炎、気管支 喘息、気管支 拡張症の喀痰 排出困難、小 手術時の術中 術後出血(歯 科、泌尿器科 領域)の場合 2歯槽膿漏症 (炎症型)腫脹 の融解の場合	

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果・症状の悪化 につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							
	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	抗炎症作用 (1)抗アレ ルギー作用 (2)アラキドン 酸代謝系酵 素の阻害作 用		甘草を含有する製剤、ルー ブ利尿剤・チアジド系および その類似降圧利尿剤	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)			アルドステロン症、 ミオパシー、低カリ ウム血症(低カリウ ム血症、高血圧症 等を悪化)	高齢者、妊婦等、 小児		長期適用に よる偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹
	グリチルレチ ン酸	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系お よびその類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)			偽アルドステロン 症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等		長期適用に よる偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹
抗 炎 成 分	トラネキサム 酸	トランサミン カプセル	抗プラスミン 作用(抗線溶 作用) ・止血作用 (フィブリン分 解を阻害する ことによる 止血) ・抗アレ ルギー・抗炎症 作用	トロンピン(血 栓形成傾向)	ヘモコグラーゼ(大量併用 により血栓形成傾向)、パト キシピン(血栓・蓄積症)、凝 固因子製剤(口腔等、線溶 系活性が強い部位では凝固 系がより亢進)	0.1~1%未満 (食欲不振、 悪心、嘔吐、 下痢、胸や け)、0.1%未満 (眠気)	0.1%未満(過 敏症)	トロンピンを投与 中	血栓、消費性凝固 障害、術後の臥床 状態および圧迫止 血の処置、腎不 全、本剤に対し過 敏症の既往歴、高 齢者				トラネキサム酸として、通 常成人1日750~2,000mg を3~4回に分けて経口投与 する。高齢者で減量。	○全身性線溶 亢進が関与す ると考えられる 出血傾向 (白血病、再 生不良性貧 血、紫斑病等、 および手術中・ 術後の異常出 血) ○局所線溶亢 進が関与する と考えられる異 常出血 (肺出血、鼻 出血、性器出 血、腎出血、前 立腺手術中・ 術後の異常出 血) ○下記疾患に おける紅斑・腫 脹・そう痒等の 症状 ・湿疹およびそ の類症、荨麻疹 ・発赤・充血・腫 脹等の症状 ・扁桃炎、咽喉 頭炎 ○口内炎にお ける口内痛お よび口内粘膜 アフター
	アラントイン	なし												

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	用法用量	効能効果	
殺菌成分	フェノールを使用	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)		・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)				・原液または濃度液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起すことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、薄度にて注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、バッグに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起すおそれがある。] ・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)	効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして15~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下疳疾患の鎮痒 瘡疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)			
塩化セチルピリジ	スプロールトローチ	口中で頻繁に遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。				0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)						口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)		1回1錠を1日3~4回かまらずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽喉炎、扁桃炎、口内炎		

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量以上	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ			
	グルコン酸ク ロルヘキシジ ン	医療用には 歯科用がなく、 塩酸クロ ルヘキシジ ンのトロー チ・ダント ローチを使 用	抗菌剤の中 でも広範囲の 微生物に作 用する部類に 属し、特にブ ドウ球菌など のグラム陽性 球菌には、低 濃度でも迅速 な殺作用を示 す。一方、大 腸菌などのグ ラム陰性菌に も比較的濃度 で作用する ことが知られ ているが、グ ラム陽性菌に くらべ感受性 に幅がみられ る。 真菌類の多く にも感受性を しめすが、全 般的に細菌 類よりも抵抗 性がみられ る。			0.1~5%未満 (舌のしび れ、味覚異 常、口内炎、 黒舌症、胃部 不快感、胃部 膨満感、嘔 吐、下痢等)	頻度不明 (過敏症)							口腔内で唾液に より徐々に溶か しながら用いる (噛み砕いたり、 飲み込んだりし ない(トローチと しての注意))		通常、1回1錠(塩酸クロル ヘキシジンとして5mg)を1 日3~5回、2時間ごとに投 与し、口中で徐々に溶解さ せる。	口内炎、抜歯 創を含む口腔 創傷の感染予 防
殺 菌 成 分	クレオソート	配合剤しか なしか なかったため、 薬局方を用 いた	本薬の防腐、 殺菌作用は フェノールに 劣るが、毒性 並びに刺激 作用は弱い。 粘膜、創傷面 などに対し、 初め刺激する が、後に知覚 麻ひを起こす										大量使用で粘膜 の刺激、痙攣、 更にめまい、昏 睡、けいれん			うか及び根管 の消毒、歯髓 炎の鎮痛・鎮 静。用法に 従ってうか及 び根管の処置 後、適量を滅 菌小綿球又は 綿織維に浸潤 させてか内あ るいは根管内 に挿入し、仮 封する。	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応薬品	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)						スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量以上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
チモール	保存剤として十分なため、薬局方を用いた	本薬は他の有機物が共存しなければフェノールやクレゾールより殺菌力が強い。健康な皮膚、粘膜を腐蝕せず、わずかに刺激により剥離を起こす程度である。しかし、創傷粘膜に対してはかなりの刺激性を有する。内服しても著しく胃腸を刺激することがないから内用剤としても用いられる。					服用後、食道や胃腔内にやけるような感覚を引き起こす。腸のぜん動作用を刺激して下痢症状を起こす。													局所の殺菌用に液剤、軟膏剤又は粉剤として使用されている。例えば、チモール1%とサリチル酸3%を含むエタノール溶液、酸化亜鉛やステアリン酸亜鉛を含む1~2%の軟膏、チモール2%、ホウ酸35%を含むタルク製剤などが用いられる。その他本薬はうがいぐすり、洗淨料、歯みがき剤などに添加して用いられる。
ヒノキチオール	配合剤のみ																			

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果		
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
	フェノール	フェノール 歯科用では ない					頻度不明(過 敏症)					・原液または濃 度液が皮膚に付 着した場合には ・擦熱及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること ・本剤は必ず ・希釈し、濃度 に注意して使用 すること。・炎症 または刺激性 の部位に使用す る場合には、濃 度に注意して正 常の部位に使用 するよりも低濃 度とすることが望 ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギプ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。〔吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。〕・誤飲 を避けるため、俣 管及び取扱いに は十分注意する こと。		効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痛 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)	
局所麻 酔成分	アミノ安息香 酸エチル	ビーソカイ ン・ゼリー	神経幹には 効果はないが 神経末梢部 において麻酔 作用があり、 粘膜および表 皮剥離部局 所の知覚を 麻痺する作用 がある。 本剤は塩化 ベンゼトニウ ムを含有し、 St.aureus FDA 209P、 E.coliおよび P.aeruginosa に対し抗菌力 を示した。		中枢神経(振 戦、痙攣)	ショック	中枢神経(眼 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐)	過敏症				歯科用以外に 使用しないこと。 使用量は必要最 少量にとどめるこ と		本剤を適量取り、局所に 塗布する。	歯科領域にお ける表面麻 酔。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカ イン ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心神 経繊維のNa ⁺ チャネルを遮 断すること により局所麻 酔作用を発現 する。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔 薬であるが、 より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用い る		探聴、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質、 高齢者。妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。					使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔0.05～0.1%注射 液にエピネフリンを添加し たものを用い、塩酸ジブカ インとして、通常成人10～ 30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人3～40mgを 使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人1～40mgを 使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜 麻酔には、1～2%液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、噴霧または塗布 する。 ・眼科領域の麻酔には、 0.05～0.1%液にエピネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1～5滴を点 眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、 0.1%液にエピネフリンを添 加したものを用い、塩酸ジ ブカインとして、通常成人 男子10～20mg、女子3～ 7mg ・膀胱粘膜麻酔には、 0.025～0.05%液にエピ ネフリンを添加したものを用 い、塩酸ジブカインとして、 通常成人10～20mg ・局所鎮痛には、0.025～ 0.05%液を用い、適量を使 用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフ リンを添加したものを用い、 伝達麻酔・浸潤麻酔には 塩酸ジブカインとして、通 常成人1～2mg	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上り過ぎ使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	グリチルリチン酸モノアンモニウム：グリチロン注一号を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
	グリチルレチン酸	グリチルリチン酸モノアンモニウム：グリチロン注一号を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
組織修復成分	銅クロロフィリンナトリウム	内服の配合剤のみしかなかった																
止血成分	カルバゾクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg)／アドナ(AC-17)錠30mg／アドナ(AC-17)散10% カルバゾクロムがなかったためカルバゾクロムスルホン酸ナトリウム製剤の添付文書を使用	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないことによる出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1～5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者						カルバゾクロムスルホン酸ナトリウムとして、通常成人1日30～80mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼出血・鼻出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血

内服歯槽膿漏薬

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
抗炎症成分	塩化リゾチ ム	レフトゼ ム	抗炎症作用 癒瘍形成・組 織修復作用 膿粘液の分 解と排出作 用 出血抑制作 用	ショック、アナ フィラキシー 様症状・SJS 様候群・Lyell 症候群(頻度 不明)	0.1～5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー・アナ フィラキシー・ショッ クを含む過敏症 状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のアレ ルギー性素因、両親、兄弟等がアレ ルギー症状の既往 歴、高齢者		作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、過 量と投与しな い。		慢性副鼻腔炎の腫脹の 軽減、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチムとして、60～ 270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2.歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の軽減 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチムとして、180 ～270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量。	慢性副鼻腔 炎の腫脹の 軽減、痰の 切れが悪く、 喀出回数 が多い気管 支炎、気管 支拡張症 の喀痰喀 出困難、小 手術時の術 中術後出血 (歯科、泌尿器科 領域)の場合 2.歯槽膿漏 症(炎症型)腫 脹の軽減の 場合
組織修復成分	細クロロフィ リンナトリウ ム	内服の配合 剤のみし なかつた											
止血成分	カルバソク ロム	アドナ(AC- 17)錠(10mg) ／アドナ (AC-17)錠 30mg／アド ナ(AC-17) 散10%	細血管に作用 して、血管 透過性亢進 を抑制し、血 管抵抗値を 増強する。血 液凝固・線溶 系に影響を 与えることなく 出血時間を短 縮し、止血作 用を示す。 血管透過性 抑制作用、 細血管抵抗 値増強作用 、出血時間短 縮作用、血 小板・血液凝 固系に対する 作用、呼吸 系・循環系に 対する作用を 有する。	0.1～5%未 満(食欲不 振、胃部不 快感、悪 心、嘔吐) 0.1%未満(悪 心、嘔吐)	頻度不明(過 敏症)		本剤の成分に対し 過敏症の既往歴、 高齢者					カルバソク ロムスルホン ナトリウム として、通常 成人1日30～ 90mgを3回に 分割経口投与 する。 なお、年齢、 症状により適 宜増減する。 高齢者では減 量。	毛細血管抵抗 性の減弱及び 透過性の亢進 による出血傾向 (例えば紫斑病 等) 毛細血管抵抗 性の減弱によ る皮膚あるいは 粘膜及び内 臓からの出 血、眼底出血・ 腎出血・子宮 出血 毛細血管抵抗 性の減弱によ る手術中・術後 の異常出血

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンC(アスコルビン酸) 成分	アスコルビン酸「ヨシダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壞血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。				顔度不明(悪心・嘔吐・下痢等)									下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血、鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1. ビタミンC欠乏症の予防および治療(壞血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など。) 2. 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。なお、2の効能・効果に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
フィットナジ オン	カチーフN錠 (5mg錠) / カチーフN錠 (10mg錠) / カチーフN散 10mg/g	ビタミンKは 血液凝固機 転に関与し 、血液凝固 機能を正常に 維持する。		クマリン系抗凝薬(ワル ファリン)(ワルファリンの作 用減弱)			類薬(メナジ オン)により、 高ビリルビン 血症(大量・ 長期投与) 頻度不明(悪 心、嘔吐、軟 便)			妊婦末期(大量投 与)					・大量・長期投与 で高ビリルビン血 症(類薬-メナジ オン) ・妊婦末期の婦 人には大量投与 を避けること。 (類薬-メナジ オンで、新生児等 に高ビリルビン 血症)			フィットナジオンとして、通常 成人1日5~15mg、新生児 出血の予防には母体に対 し10mg、薬剤投与中にお こる低プロトロンビン血症、 胆道及び胃腸障害に伴う ビタミンKの吸収障害、肝 障害に伴う低プロトロンビ ン血症には20~50mgを分 割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	ビタミンK欠乏 症の予防及び 治療 各種薬剤(クマ リン系抗凝薬 、サリチル 酸、抗生物質 等)投与中に おこる低プロ トロンビン血 症 肝障害に伴う 低プロトロン ビン血症 ビタミンK欠乏 が推定される 出血
ビ タ ミ ン 成 分	酢酸トコフェ ロール	ビタミンE 剤・ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。				0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)							末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわ たって溼然と 使用すべき ではない。		錠剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止	

禁煙補助剤

製品群No. 77

ワークシートNo.47

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
禁煙 補助剤	ニコチン	ニコチネル TTS	タバコに含ま れるニコチン を経皮的に吸 取させ、禁煙 時の離脱症 状を軽減	アドレナリン遮断薬(アドレ ナリン遮断性の減弱)、アドレ ナリン作動薬(アドレナリン作 動性の増強)、禁煙開始後 (フェナセチン・カフェイン・テ オフィリン・イミプラミン・ベン タゾシン・フロセミド・プロプラ ノロールの作用の増強)			5%以上(一 次刺激性の 接触皮膚炎 (パッチのた め)、不眠)、 0.1~5%未 満(皮膚刺 戟・色素沈着 (パッチのた め)、頭痛、 めまい、倦怠 感、異夢、悪 夢、集中困 難、嘔気、嘔 吐、腹痛、口 内炎、下痢、 食欲不振、 ALT、LDH、 γ GTP、総ビリ ルビンの上 昇)、0.1%未 満(疲労、し びれ、眠気、 易刺激性、胸 焼け、AST上 昇)			非喫煙者、妊婦・ 授乳婦、不安定狭 心症・急性期の心 筋梗塞・重篤な不 整脈・経皮的避動 脈形成術直後・冠 動脈バイパス術直 後、脳血管障害、 本剤成分過敏症 既往歴	心筋梗塞・狭心症 既往歴、狭心症で 症状が安定してい る、高血圧、不整 脈、脳血管障害、 心不全、末梢血管 障害、甲状腺機能 亢進症、褐色細胞 腫、糖尿病、消化 性潰瘍、肝・腎機能 障害、アトピー性皮 膚炎・湿疹性皮膚 炎(パッチとしての 注意)、てんかん又 は既往歴、神経筋 接合部疾患又はそ の既往歴、高齢 者、		禁煙の意志 が強く、循環 器疾患、呼吸 器疾患、消化 器疾患、代謝 性疾患等の 基礎疾患を 持つ患者で あって、禁煙 の困難な喫 煙者に行う こと。		過量投与で急性 ニコチン中毒症 状。禁煙指導を 実施。本剤使用 中は喫煙により 循環器系等への 影響が増強され るので、喫煙させ ない。	禁煙の長期 使用によりニコ チン依存性が 鋭利に引き 起こされ難 くなる症例が 報告。10週間 を超えて投与 しない。		ニコチネルTTS10(ニコチ ンとして17.5mg含有)、ニコ チネルTTS20(ニコチンとし て35mg含有)又はニコチネ ルTTS30(ニコチンとして 52.5mg含有)を1日1回1 枚、24時間貼付する。通 常、最初の4週間はニコチ ネルTTS30から貼付し、次 の2週間はニコチネル TTS20を貼付し、最後の2 週間はニコチネルTTS10 を貼付する。なお、最初の 4週間に減量の必要が生 じた場合には、ニコチネル TTS20を貼付する。本剤は 10週間を超えて継続投与 しないこと。	循環器疾患、 呼吸器疾患、 消化器疾患、 代謝性疾患等 の基礎疾患等 を持ち、医師によ り禁煙が必要 と診断された強 い喫煙者が、 医師の指導の 下に行う禁煙 の補助